

3 「思考力」を育成する学習指導の実際

単元 「リズムに合わせてダンスを創ろう～ダンスミュージカル～」(5年)

<本時育成したい「思考力」>

グループごとの表したい感じが強まるよう、動きの工夫(時間・空間・仲間を生かした動き)を考える。

(1) 学習指導レベルの教材

動きの工夫を「戦い」の場面に限定する

表現とは、自分たちの伝えたいイメージを身体の動きによって表すことである。しかし、イメージという抽象的なものを身体の動きだけで伝えることは容易ではない。イメージを他者に伝えるためには、ある部分を強調する等、動きを工夫することが大切である。しかしながら、子どもたちが考えている全ての場面において、動きの工夫を一度に考えさせようとすると、思考が拡散してしまうおそれがある。

そこで、ここでは「戦い」の場면을教材とし、そこでの動きの工夫を考える。この場面はライオンキングには欠かせない場面であり、多くのグループが取り入れている。それだけ子どもたちの関心も強く、思考活動の必要性が生まれやすい。

また、「戦い」の場面は、現実を模倣するだけの「マイム」になりやすい。しかし、逆に考えると、このことは、子どもたちに表したい感じを強めるためにはどうしたらよいかという願いを強く抱かせ、動きの工夫を考えていこうとする構えをもたせることができる。

グループによるダンスの再構成

「戦いの場面の動きをもっと工夫したい。」こうした子どもたちの課題は、グループでダンスを再構成する活動によって解決される。グループで動きを考えることには、自ずと本時で身に付けさせたい「時間・空間・仲間を生かした動きの工夫」が含まれており、「いっしょに」「対立して」「ゆっくりと」等の動きの反応として表出されやすいからである。

(2) 子どもの反応の組織化

「戦い」の場面の動きづくりには意欲的に取り組むものの、子どもたちの動きは単調で同じことを繰り返してしまっている。

当の子どもたちからも、「戦いの場面では、どうしてもけんかをイメージしてマイムの動きが多くなってしまふな。」という言葉が多く出されたため、どの動きが「マイム」になっているのかを、共通認識させるために以下のような支援を行った。

【意味の共有化】

マイムが多くて困っているグループのダンスを取り上げ、マイムの部分を再現しながら指摘、説明させる。

実際の動きを見て「マイム」となっている動きを発表させた。

C1: 「戦いの時に1対1でけんかの様子を表現しているな。」

C2: 「手を挙げてライオンが爪でひっかく動きをしているな。」

C3: 「何人かで同じ動きをして攻めたり守ったりしているよ。」

「マイム」が見られた瞬間には多くの子どもたちから反応が表れた。そして、それらの



動きを実際に再現しながら発表させたので、どの動きが「マイム」となっているか共通認識することができた。

発表段階で、C3の意見に対し、

C4：「C1、C2さんが言ったのはマイムだけど、C3さんのは違うと思います。わけは、グループみんなで戦おうとするイメージが感じられるからです。」

という反論が出された。教師はこの発言を取り上げることで、「仲間を意識した動きの工夫」を浮かび上がらせることができると考え、以下のように支援した。

【異同関係の明確化】

C1、C2とC3のマイムに対する捉え方の違いを比較させる。

まず、「C3の指摘した動きはマイムではない」という意見から発表させた。

「集団で動いてダイナミックに感じた。」

「グループで攻めているという感じがした。」

そこで、集団・グループという視点から、C1・C2の指摘した動きを比較させた。

「1対1や、個人で動いていることが多い。」

「動きが小さく、一人で動いているときにマイムになっているんじゃないかな。」

これらの考えを交流する中で、「みんなで」「いっしょに」「大きく」等を意識して動きを工夫することの大切さが浮かび上がってきたのである。



そこで、自分たちのグループのダンスを振り返り、どの場面で「マイム」の動きになっているか、見つめ直すことができるよう、以下のような支援を行った。

【整合性の吟味】

ビデオを見て、自分たちのダンスの中から「マイム」で表現する動きを取り上げ、それらの動きを「みんなで」「いっしょに」「大きく」という観点から見直し、修正させる。

マイムになっていると指摘された場面をビデオで撮影し、その場面を振り返りながらダンスの修正を行っていった。

C5：「2人で戦っているだけで、まわりの人が立っているだけだよ。」

1人に対して、残りの人がみんなで攻撃しよう。」

上記以外にも、「一方が前に進めば、もう一方が下がるように動く」「最後の攻撃の時には、みんなで大きくスローモーションで動く」等、動きの工夫を見出す子どもが多く見られた。

こうして子どもたちは、自分たちのグループのダンスにも「みんなで」「いっしょに」「大きく」といった観点を意識した動きを加えていった。

また、子どもたちの考えには互いに押したり引いたりする「空間」、スローモーションで動く「時間」の観点も含まれていた。そこで、その根拠を尋ねると「押したり引いたりする方が、攻めたり、守ったりしている様子がよく伝わったから。」「スローモーションで動くとかっこよく見えて、緊張感が生まれるから。」と答えた。

「戦い」の場面を強調するために、「空間」「時間」という新しい観点を見出したり、自分たちのダンスの中にそれらの観点を取り入れたりしていこうするグループも見られた。こうした動きの工夫も「仲間を生かした動き」と同じように集団の場で取り上げていくことで、子どもたちから導き出すことができたのである。

